

(二) 番匠川の詩

武田剛

(会員・佐伯市木立)

一、かもしかの渉る三国の

佩楯はしぐれてやまず

西南の戦のあたり

億をふる化石は濡れて

椎茸の榎場の淵に

仙人はやまめ影追う

二、炭がまの煙は消えて

なみよろう山に杉立つ

河鹿鳴く鍾乳洞の

葉桜に風のそよげば

白きはぎ洗うにまかせ

宵やみに螢を呼べる

三、聖嶽古人の洞の

霧晴れて茶の芽かぐわし

媪らは柴を折り焚き

翁らは一揆を語り

深潭の潜龍のごと

緑なる玉露を含む

四、久留須川合せて蒼き

鬼ヶ瀬の鯉の水音

かわせみは狭霧に消えて

若鮎の堰を越ゆれば

さやけくも稻穂の鳴れど

水うがつの語らず

五、蛾々とした釈魔の嶺の

狼声に旅人おびえ

越えしとか中の谷なる

峠より起きし奔馬か

井崎川飛沫をあげて

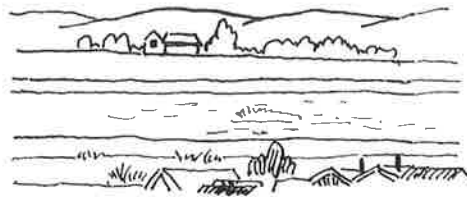
床木川 天領下る



六、野をめぐり望む古城の
梅牟礼に雄叫び遠し
城を背に落ちゆく主従
残月の磯に立てり
かじかめる指に掬せし
その流れ今に語るを

七、水ぬるむ濤の岸边の
川浪に笹垣立て、
水鏡うつれる底の
くまえびの細きはさみよ
白魚はさだかに見えず
椀にくむいのちはかなし

八、海よりの迎えの汐に
たゆとうてはぐくむ貝を
弥生なる太古の人の
すなどりし白瀉のあと
貝塚の白きを見れば
悠久の流れを想え



九、鶴屋城天主を映し
花火映え弦歌浮かべ
千石の船は白帆に
風はらみ上に旅立つ
帰る帆の京の便りを
あらそいて舟子に聞きしか

十、日向灘 八潮路こえて
掠めくる海賊たちの
あわれにも果てし葦間に
かりがねの鳴きて落つれば
淡雪を茜に染めて
元越の頂き暮る、

十一、はるかなる歳月捲まず
はこびたる細き砂々
洲をつくり鶴の舞いしが
拓かれて戦の庭に
銀翼の弾を抱きて
若者の征きて還らず



十二、夏草の茂れる跡の

工場の濁りの水の

泡立ちて海にそ、げば

番匠の母なる川の

その嘆き消ゆる日はいつ

遠き日の藍を恋いつ、

(三) 俳句 観世音

三浦 エミ子

(会員・佐伯市海崎中野西区)

たなごころ開きてゆれる紅芒

剝製の日本カモシカ紅葉宿

花芙蓉今日美しく咲きおわり

それぐの生立寂し秋の草

胸に珠いだき秋思の観世音

表紙解説

今回も前号に引き続き鍍絵を紹介した。写真は直川村間庭 木下氏宅の倉に残っているものである。

鍍絵は何処でも同じように、倉につきもの、「折りカギ」(足場などを結わえるためにつけられたし型の金具)を軸として実にうまく仕上げている。

編集部

◆訂正とお断り

前号二五頁の表紙解説で、写真の鍍絵は佐伯市大越(武田仁氏宅)とありましたが(武田幸治氏宅)の誤りでした。お詫びして訂正します。